

## 糖尿病エンパワーメント： 糖尿病劇場®にみるコミュニケーションの実践

名古屋大学大学院医学系研究科 地域総合ヘルスケアシステム開発寄附講座

講師 岡崎研太郎

効果的なヘルスサポートでは、対象者の興味をひきつけるコンテンツが重要であることは言うまでもない。しかし、面白いコンテンツや興味深い保健指導方法のハウツー・スキルの根底には、多くの場合、しっかりとした「こころ（マインド）」が存在していることは見過ごされがちではないだろうか。

この、こころを考える一例として、糖尿病エンパワーメントを取り上げる。糖尿病エンパワーメントとは、1990年代に「糖尿病教育にもパラダイムシフトを！」と、ミシガン大学の教育学者 Robert M. Anderson と看護師 Martha Funnell らを中心とする糖尿病研究教育チームが提唱し始めた理念であり、彼らの糖尿病ケア・療養指導における実践での経験を言語化したものである。（あえて一文でまとめれば、糖尿病は患者のものであり、患者自身がその問題を解決し、治療方針を立てていく権利と能力を持っている、となろうか。）これまでの医療者に馴染みの深い急性期モデルでは、医療者は指示する人で患者は従う人という役割分担のもと、医療者患者間には一方向性の上下関係がある。このモデルでは、結果が悪ければ、患者は「ビョウシキ（病識）がない」「やる気がない」「コンプライアンスが悪い」とレッテルを貼られてきた。

けれども、糖尿病をはじめとした慢性疾患の診療においては、医療者の指示に患者が従わないことも多く、急性期モデルがうまく機能しないことのほうが多い。「なぜあの患者さんは言うことを聞いてくれないんだろう？」と医療者はフラストレーションを貯め、患者も「どうしてうまくいかないのか、食べ過ぎてなんかいないのに」とイライラをつのらせる、そうしたすれ違いは外来の診療室で繰り返される光景である。こうした日常の診療におけるよくあるすれ違いをとりあげ、エンパワーメントの視点、とりわけコミュニケーションという要素を用いて味付けしたものが、演者らが開発した「演劇を用いたワークショップ型医療者教育：糖尿病劇場®」である。

今回の講演では、神の手を持たない平凡な内科医として診療や健康教育にかかわってきた演者の実践経験の中から、糖尿病劇場®をはじめとした様々な取り組みを紹介するとともに、その背景にある考え方（こころ）を糖尿病エンパワーメントの理念を踏まえて解説する。

### 参考資料

- 1) 糖尿病エンパワーメント ―愛すること、おそれること、成長すること（第2版）石井均監訳 医歯薬出版、2008
- 2) 行動変化をうながす糖尿病エンパワーメント 101のコツ 大橋健訳 医歯薬出版、2005